

第12号 全巨里教化所 編

I. まえがき

人類社会が始まると共に、他人に害を及ぼす少数犯罪者たちを隔離収容して処罰するほかない状況は東西古今を問わず常に続いてきた。したがって今日この世の中に刑務所が無い国家はない。このように人類と反社会的犯罪者を隔離する慣行は、人類の歴史同様長いものである。したがって刑務所制度それ自体が問題になることはない。

しかし人類の共同性と良心は、たとえ罪人といっても無条件に処罰する事は誤ったことであり、犯罪を減らすことに役立たないという事実を永く痛い経験を通じて悟ることになった。そして一度の誤りで罪を犯しても、己の誤りを悔い改めるように支援するべきだということは今日人類が悟った知恵だと言える。すなわち、厳罰一辺倒の行刑制度は犯罪を防止することに役に立たないという事実を学ぶことになったのである。特に18世紀の英国人博愛家 John Howard (1726-1790) のような行刑制度の改革運動は、ついに今のような人権中心の制度を産むことになった。

国連は既に1957年7月『囚人の処遇に関する最低基準法』を宣言した。その結果、大部分の国家では囚人処遇において、このような標準規則が尊重されている。今や刑務所は処罰中心の場所ではなく、人をまさに教育する場所が変わった。だから一国の発展を測定するさまざまな基準の中に行刑制度が含まれている現実には極めて当然だといえる。一国の発展の真の姿を見ようとするなら、その国の行刑制度を見れば知ることが出来る。

日本の北朝鮮難民救援基金、韓国の北韓人権情報センター(Database Center for North Korean Human Rights-NKDB)、北朝鮮人権国際活動家メアリ(International Echo for North Korean Human Rights Activists-IENKA)、そして北朝鮮人権改善の会などの民間団体はこの間、北朝鮮で展開されている人権侵害の事例が、その類例を探しにくいほど苛酷だけでなく人権弾圧の水準を越えた、到底許しがたい反人倫犯罪、すなわち人間が同じ人間に犯すことができない苛酷な犯罪行為に至っているということを知るに至り、驚きと怒りに耐え得なくなっている。

この中で特に、北朝鮮の深い山の中に隠されている政治犯収容所(管理所)に注目し、その実態に身震いせざるを得なかった。当然、北朝鮮の政治犯収容所の実態が真に凄惨な水準であったため、秘密政治犯収容所が最も酷い所だと考えてきた。北朝鮮の政治犯収容所(管理所)は北朝鮮の法律でも違法である。

しかし継続した調査活動は、再び私たちの心を引き裂いた。北朝鮮の一般教化所で行われている虐待の程度がすべての面で政治犯収容所を凌駕していると同時に、途方もない規模の死亡者が発生していることを知ることになった為である。

北朝鮮では政治犯は裁判も無く、一旦収容所に収監されれば、大部分の場合生涯完全統制区域に収容されるため、その間同じ職種に長期間強制的に動員されている。したがって

政治犯たちは自然と高度な技能工になり、彼らの生産は北朝鮮全体の経済に相当な比重を占めることになった。その過程で政治犯収容所は徐々に生産基地としての地位を占めることになり、政治犯は無賃金の生産技能工として殴打、拷問などの非人間的虐待は続いているが、ひとまず生産基地として安定した秩序が維持されている。

反面、一般教化所はたとえ 10～20 分程度ではあるが形だけの裁判を受け、一定期間の刑期を満たさなければならない囚人たちである。したがって苛酷な処罰の対象である囚人であり、技能工としての価値が相対的に小さい。したがって囚人たちに対する虐待は想像を超越する苛酷一辺倒であり、その結果多くの囚人が死んでいる。

教化所の囚人たちは大部分 3 年以下の懲役刑宣告を受け、農作業、伐採、採鉱などの重労働を強要される。しかし、作業量に比べて配給される食事量は非常に不足し、大部分が栄養失調状態に置かれている。普通 12 時間以上の強制労働に苦しめられた後、疲労した体をやっと支えながら別途に無意味な学習に何時間も苦しめられる。決まった作業量を達成できなければ食事量を減らすとか、寝させないとかの処罰を受ける。普通一食 300 g だが独房処罰者には 30 g 未満の食事が提供される。したがって収監者は生き残るために周りの蛙、鼠や蛇、ミミズや昆虫を手当り次第捉えて食べなければならない。教化所に入所した時の体重 72 kg が出所当時 45 kg だったとか、54kg の体重が 24 kg に減ったなどの証言はよく聞く内容である。「私たちは 40 人が一緒に入所したが 3 年後に出所したときの生存者は 5 人もいなかった」とか「監房 50 人の囚人中 29 人が死亡した」などの証言を色々な証人からよく聞く。全巨里(フョングリ)教化所服役中、全面的に死体処理業務を引き受けたある収監者は“1998 年 6 月 30 日から 1999 年 1 月 19 日までの 6 ヶ月 19 日の間に火葬後に埋めた死体の数は正確に 859 体であり、これは一日平均 4.5 人の収監者が死亡したことを示すと証言している。北朝鮮の教化所は一言で殺人施設だと言っても過言ではないほど死亡者数が多い。

このため、北朝鮮の一般教化所に対して特別な関心を持つことになり、その実態を調査することになった。人は嘘をついたり悪事をしたりすれば隠し事が生じる。悪事をすればするほど隠し事が多くなる。北朝鮮政権はどんなに多くの悪事をしたのか、総ての事を隠している。悪事をたくさんしていることを自ら認めている様子だ。北朝鮮では太陽が東から昇る事実も秘密にしなければならないほど隠すことが多い。その結果、北朝鮮の教化所に関する資料は公式に殆どない状態である。したがってこの報告書は北朝鮮当局の公式資料無しで作成され、そのためにやむなく不足した点は、全面的に北朝鮮当局の責任である。

この間の調査によれば全巨里以外の 10 ヶ所余りの他の教化所の事情も別段違いは無いが、全巨里よりも劣悪な所があることを示唆している。このような調査は今後も活発に続けなければならない。人間にネズミのように食べさせて牛のように働かせるだけでなく、人間を獣以下の存在として扱う北朝鮮の教化所こそは人間の自由と人権を追求する総ての人類から非難を受けて当然である。

ソウルにある北韓人権情報センターのデータベース資料によれば、1995 年から 2009 年の間に全巨里教化所で服役した経験がある韓国人は 2011 年末現在男 51 人、女 30 人の計 81 人に至る。この報告書は全巨里教化所の囚人であった証人たちの証言を総合した結果であり、(社)北韓人権情報センターが運営する『NKDB 統合人権 DB』に含まれている、この

間の北朝鮮の人権に関する総ての文献資料と別途に 8,934 人の証言に基づく証言資料を参考にした。

読者の正確な理解のために文章で描写が不足した部分は絵で補充した。相当する絵は全巨里教化所を経験した証人が直接描いてくれたものである。その方々にこの場を借りて感謝申し上げる。この間、全巨里教化所で悔しさの中で死んでいった総ての無辜の犠牲者たちに頭を下げて冥福を祈りながら、今この瞬間にも言葉通りの生き地獄即ち北朝鮮にある総ての拘禁施設で凄惨な人間虐待の中で死に直面している私たちの隣人を決して忘れず、最善を尽くして最後まで彼らを助けるといふ私たちの決心を再確認する。

Ⅱ. 施設及び資材

朝鮮民主主義人民共和国第 12 号全巨里教化所は、咸鏡北道会寧(フェリョン)市から清津(フンジン)方向に約 12Km 離れた高い山中にある小さな農村集落に位置している。この教化所は 1970 年代末に第 22 号青年教養所という名称で立てられ、当時教養所の塀の高さは 6m だったという。その後、1980 年代中盤に第 12 号教化所と名前を変え、塀の高さは 8m に改修されたという。

現在、全巨里教化所は本所建物の他に東南側に約 1.5km 離れた所に銅鉾山があり、東に 5km 程離れた海拔 1,000m の高さに農場がある。各々数百人の囚人がここで別に収容されている。ここはコンクリート壁でなく鉄条網が垣根状に積まれており、この垣根は高圧線のできた 3m の高さの電気鉄条網を中心に両側 3m の距離に全く同じ高さであり、総幅が 6m の 3 重鉄条網で警備されている。山勢があまりにも険しく、40 度以上の急な丘の上にある作業場へ移動すること自体が、すでに大変な苦役である。巧妙な山勢で、囚人が一度足を踏み誤れば再び教化所本所の建物に戻るようになっており、脱出を非常に難しくしている。

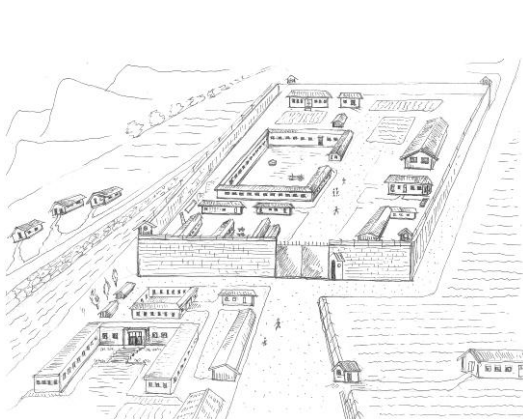


作業場に向かう囚人たちの様子

本来は男性だけの教化所だったが脱北女性の数が急増するや、2007年4月頃から女性を収監し始めた。囚人の数は時期により差があるが2009年から10年当時で女性が約1,350名程度、男性が2,000名程度であった。

ここの囚人の中で一般的な囚人は僅か20~30%未満であり、大部分は他の国では処罰されない囚人であり、特に脱北者が主流をなしている。北韓情報センターの資料によれば全巨里教化所収監経験者の中で今韓国に来ている人は81名でその内62名は脱北した罪で収監され、その他4名は北朝鮮体制に対する不満表示罪で服役した。全巨里教化所は脱北者収監専用教化所と言っても過言でない。

最近の人工衛星写真と前収監者が描いた教化所の絵に大きな違いは無いことが分かる。



全巨里教化所の全景



全巨里教化所の衛星写真

教化所運営方式と条件は時期によって違いがあるが監房、作業室などその他衛生施設は普通の人々が想像できないほど劣悪であり、収容人員は常に定員を何倍か超過する状態である。壁と天井および床は粘土、オガ屑及び石灰石などを混合して作った材料で三化土(サムファト)と呼ぶ。セメントの代用で使っているが、囚人の食事時間にも天井や壁から塊が落ち、そしてご飯をまともに食べられないほど、いつも三化土爆弾の洗礼を受けている。

一旦教化所に到着すれば総ての収監者は無条件に所持品と身体検査を受けなければならない。慣れない教化所という環境で、少しでもきよろきよろ見回したり戸惑ったりすれば激しく殴られる。女性収監者は極度の羞恥心を誘発する。監房に入る時は後から蹴っ飛ばして監房にぶち込む。

女性収監者たちの場合



男性収監者の場合





男性囚人の様子



女性囚人の様子

この三化土粉塵よりも苦しいのは虱、南京虫、蚤など各種の虫である。そのため囚人は時間があれば虱取りをするが、服を脱いで爪を当てれば虱、南京虫、蚤などが服からばらばらと落ちて床と壁の隙間に隠れてしまう。虱と南京虫が多過ぎて、時にはいちいち手でつかむことができず服を脱いで踵で踏めば虱と蚤などの虫が踏まれて潰れる音が聞こえるほどである。したがって服には一様に血が染み着き、皮膚病による傷があちこちにでき、程度によっては座っていることも大変なほどである。初めて入所した夜に目覚めると真っ黒な虱が全身を覆っていたという。北朝鮮の教化所では人が人を飢えさせて殺し、殴り殺しても高笑いする地獄そのものだという話が決して誇張でないだろう。



南京虫とシラミ取り

また、各種皮膚病であちこちの傷から黒い膿が流れ出し、あちこち深く凹んだ傷と腐った肉の臭いで酷くむかつく。それがもう少し酷くなると骨が表れ、もっと酷くなると骨髓炎に進み、脚を切断せざるを得ない悲劇に至ったりもする。また、疥癬などの皮膚病で体から粘液が流れ、全身の傷で動けない場合も多くある。服を脱ごうとしても服が貼りついていて、あまりに痛くて脱ぐことも大変である。

初めて汁椀を見たときは誰でも嘔吐するくらい汚く、食器は人間が食事に使う物とは言えない水準である。

トイレは監房ごとに一つずつある。便をしても水が無く、木の棒を穴に挿し込んでおいたりする。トイレの臭いが、特に夏には鼻を刺して気が遠くなるほどである。そして用便後は長い針金でかき回さねばならないし、それでも降りて行かなければ穴に手を入れる。流れずに溢れ出た便の中に手を入れ、詰まりを無くすことはほとんど不可能なことで、それもできなければ警護員の袋叩きにあう。

最小で数千名の囚人に対し 50 m² 程度の広さの洗面場が一つだけある。洗面器のようなものはなく、レンガを積んでセメントを塗った水槽が一つあるだけである。囚人全員が洗面するには非常に不足している。各自持っている手拭きや布切れを水槽に1回入れ、取り



凍った水で洗面

出して顔と手を拭く。もし少しでも、モタモタしたり水槽に布切れを2回漬けたりすれば水槽の上で囚人たちを監視する洗面場管理員の棒が容赦なく飛んでくる。基本的な水供給の絶対量が不足し、女性囚人が寒い冬にカチカチに凍りついた小川の氷を割って顔を洗わ

なければならぬほどである。

したがって監房と囚人たちから悪臭が酷く漂う。監房を見回る保安員たちは、全員顔をしかめたまま、鼻を摘まみまともに見回ることもできないほどである。この悪臭はあまりにも酷く、教化所本所の外で時々出合う地域住民は収監者の隊列を見れば背を向けて鼻を覆うほどである。時々監房の中で衛生検閲が行われるが監房を見て回る保安員は全員顔をしかめたまま鼻を覆い、まともに見回りもしない。

監房の電気施設はぶら下がった電球一つである。それさえも電圧が100Vにもならない電球で、ろうソクと大した差がない。冬場に監房の通路で暖炉を燃やせば煙が外に抜けず、監房の中に流れ込み廊下が煙で覆われる。囚人は夜ごと煙のために涙と鼻水が混じりゴホンゴホン咳をしながら生活しなければならない。

教化所で囚人の引渡をする時は一般物品の納入と同じように領収書をやり取りする。北朝鮮当局が囚人を人間として取扱わないという恐ろしい慣例を端的に見せていると言えるだろう。

囚人服が別がないので、収監者は収監時の服をそのまま着て通しているが、そこで生活する集落の人々の生活がどれくらい困るか、道に出れば誰が囚人で誰が一般人なのか見分けにくかった。それで丈夫な民間人服で囚人服を作るようにし、女性たちの頭を人の頭だと分からないほど削っている。そして囚人が死ねば死体が運び出される前に、自分より良い服ならば剥がして着、隠しておいた食べ物があれば直ちに奪って食べる。

釈放直前に教化所内部の生活、経験したこと、施設などに対し一切口外しないという誓約書に署名することを強要する。

とめどなく多くの囚人が死ぬが、その家族に死亡通知書を送らない。面会に来て子供や夫が死んだのを知って慟哭する家族の極めて悲しむ姿は大多数の囚人が目撃している。家族に凍死した死体さえも見せずすぐに火葬にする場面、収監者に他の収監者を殴り殺させる場面そして顔に真っ黒にハエがたかった患者をそのまま放置する場面などは多くの服役者たちの生々しい経験である。

韓国でスパイとして捕まり34年間長期服役後、釈放されて北朝鮮に送還された李仁模(リ・インモ)が北朝鮮の教化所を訪問後、「私のような人は、こんな所では34年でなく3年も耐えられないだろう。」と話した事実は、北朝鮮でも広く知られているようである。

教化所の谷間に死人を埋める窪みがあったが、死体が多過ぎて今は火網(フルマン)山に焼却場を別に作った。火葬しなければならないほど多くの囚人が死んでいる。

片手は膝につき、片手には杖を持って必死にあがき40度程度の山の斜面を登る収監者の悲惨な姿は、まさに獣それ自体であり、よく見られる姿である。

栄養失調、結核、熱病その他各種虐待で死んだ遺体は前に述べたプルマン山で火葬する。

北朝鮮刑法第1条には「朝鮮民主主義人民共和国刑法は犯罪に対する刑事責任および刑罰制度を正しく立て直し、国家主権と社会主義制度を保障して人民の自主的で創造的な生活を保障することに貢献する。」と書いている。これは北朝鮮当局が収監者たちの処遇に対して一定水準を保障する義務を持っていることを意味する。

しかし、教化所の実態は上の事例で見ると刑法の規定通りには守られていない。もちろん教化所には病院施設、少量の医薬品、入院室(コンクリート床)、軍医(医師)と衛生院(収監者)もある。だが簡単な手術程度だけを施しているのが実情であり、教化所内で危急

な患者が発生した場合、あるいは熱病が流行した場合には、これに対備した施設と準備がはなはだ不足している。

現実がこうなので、面会を通じて入ってきた薬品で収監者たちを治療することが最善の策として利用されている。全巨里教化所に服役した経験がある韓国市民たちの証言によれば、1人の患者に入ってきた薬を100%とすれば10人の患者に8%ずつ分け、残り20%の薬は保安員が着服するという。その結果1人の患者もまともに生かすことができない状況が発生すると証言している。

北韓人権情報センターの「NKDB 統合 DB」によれば、2011年8月を基準として他の直接的行動による死亡事件は870件であり、細部項目で見ると適正治療不備による死亡は186件と記録されている。

Ⅲ. 給食と生活

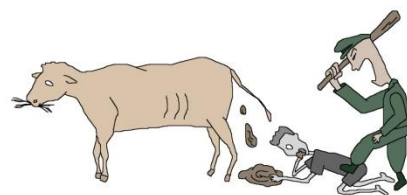
全巨里教化所の実態を一言で「ネズミのように少ない食べ物で大きな牡牛の働きを強要する所」と表現できる。監獄に3ヶ月いれば虚弱者になり、4ヶ月からは生きるか死ぬか精神的な戦いをしなければならない。収監者の中で70~80%は虚弱者である。

飯を入れた器があまりに不潔で見ただけでも吐き気がするほどである。60人程度の囚人に飯茶碗は20個程度である。だから、ご飯を貰うと直にビニールまたは、布切れに置いて空の食器をすばやく返さなければならない。汁というのは烏の翼のように見えるキャベツで葉が腐って穴があき真っ黒で本当に烏の翼のようなものであり、汁を貰えばすばやく汁の具を手で摘み他の所に受けて汁は一息に飲み干し空の器を返さなければならない。初めて到着した囚人はいくら空腹でも食べられず他の囚人に譲り渡すという。

生きて出ようとするなら、何でも片端から食べなければならない。春には野原で作業中こっそりと各種山菜や草を齧り、夏には野菜畑で野菜を盗み食いしなければ生き残れない。その他ネズミ、カエル、蛇、虫など片端から捉えて食べなければならない。



トカゲ捕り争い



牛糞の中の…

伐採作業中クヌギの木を別に少しずつ隠して、1大車分の量を(2荷車ほど)台所に持って行けば若干の米皮粉(ミグァン粉)と交換することができる。この粉を隠しておき飢餓が広まったようなとき、一口噛んで食べながら耐えなければならない。これさえも無ければタバコの吸殻からタバコを1~2本作って食糧に換えなければならない。だから囚人は地面

だけを見て通う、その日の運である。今日は生きたが明日や明後日は死ぬかも知れないという強迫観念に苦しめられたりもする。

囚人は非常に痩せて頬骨が飛び出し、目は白目だけが光り、ボロボロの麻のような服をまとい、木桶に人糞を入れて運ぶ姿、また、うずくまり集まって仕事をしている姿はあたかも蛆虫がうようよしているようだという。

男性収監者の様子



女性収監者の様子



蛇一匹を飯6握りに換え、ネズミー匹を飯2握りに換える。糞の中からカボチャの種を拾い出して食べたりもする。ネズミと蛇、蛇の卵などは特別な食事に属する。

囚人たちは虫を捕まえて食べる



蛇、ネズミを捕らえて食べる



一日一日を耐えるのがあまりにもつらく、釘のような金属を飲込んで長患いして死ぬ人も少なくない。自殺を国家に対する背信行為と見做し、その家族を迫害する北朝鮮特有の事情のため、自殺しても自然死を装うことが多く発生する。

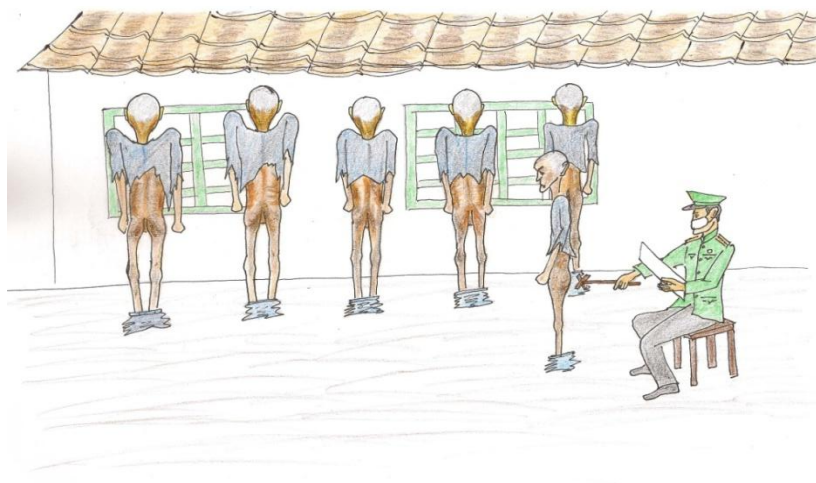
虚弱判定はズボン脱がせて肛門の大きさを調査することである。肛門が開いていれば虚弱1度、拳が縦に入る程度ならば虚弱2度、横にした拳が入る程度ならば虚弱3度である。虚弱3度は生存の見込みが全く無く、間も無く死ぬ段階である。虚弱3度を発見すると即時に病氣保釈にする。教化所内でなく、出て行って、または家に到着してから死ぬと

いう意味である。教化所内での死亡者数を減らそうとする道徳的無感覚または、無責任なみみっちいやり口といえる。許すことはできない。

虚弱基準



虚弱検査

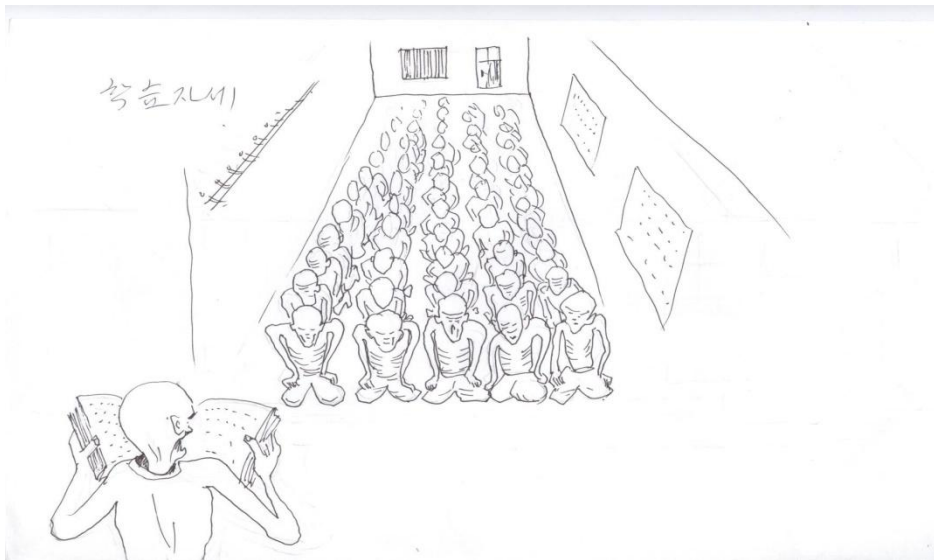


担当保安員たちは、ときに囚人に他の囚人たちの行動を監視密告することを強要したりする。これを断れば各種殴打と不利益が加えられ、仕事が一番きついと噂される伐採班に集められる。

北朝鮮の教化所は言葉どおりの生き地獄である。囚人は人間性を失って動物に変わる。このような状況下で組長、班長または仕事が少し容易な作業場への配置または給食以外の食品提供などを餌に連座罪の告白を強要したりもする。調査過程で自白しなかった隠れた秘密、告白しなかった連座者を密告させるということである。その結果、自分の出所1年前でも母が実弾6発を持っている事実を密告し、母を6年刑に追いやり（実弾は中国商人への販売用）、ある囚人は自分の叔母を8年刑に追いやった。このような方法で北朝鮮では多くの囚人を生産している。

1年365日の中で何日にもならない国家休日以外は、毎日長時間の強制労働に従事する。したがって日課が終わった後には完全に心身が疲れ果てるだけ疲れる。しかしこれで終りではない。夕食後、何時間か各種学習にまた苦しめられる。1人が前に立って1節を読めば従って復唱するのだ。内容は金正日委員長の教示とその他教化所で出版する『新しい出発』という新聞である。このような復唱読みが約2時間半程度続く。教化所では「学習をよくしよう」「罪を洗うために仕事をしよう」という以外のお話を出来ないようにした。また、相互監視を行わせ、もし1人が過ちを犯せば彼を監視していた人まで一緒に処罰する。

学習の様子



学習には生活準則と10大革命原則そして教化班準則を暗記しなければならない内容もある。この時間には列を合わせて正座していなければならない。生活準則を学習する日には大声で暗記しなければならない。保安員たちの検閲にかかれば鞭打と反復などが続き、就寝時間がより一層短くなる。

面会は賄賂無しでは不可能であり、面会時間は5分程度である。面会時、教化所内で必要な医薬品、電球、本などを持ってこなければならない。面会時15~20Kg程度のトウモロコシ粉を持って行かねばならず、その中10Kgは他の囚人用に出さなければならない。当事者には5Kg程度の量だけがやっと渡され、このような食糧で生き残る囚人が多い。この粉はどこでも水さえあれば早く食べられるために「速度戦粉」ともいう。教化所では若干余分の食糧があれば多くの生活必需品と物々交換が行われている。

IV. 作業

鍛練隊では肉が落ち、教化所では骨が抜けるという。

全巨里教化所で行われている主要な作業は、高い山で木を伐採し、その重い木材を教化所に運ぶ作業である。高度な装備が要求される作業であるが、極めて原始的な方法で作業を強行する過程で大事故が常に発生している。これによる死亡者と負傷者数はその数を推測できないほど多い。急な峠で木材を上げ下げする作業があまりにも難しく、服役者はこれを“怨恨の大車”と呼んでいる。

伐採現場の様子



伐採現場の事故



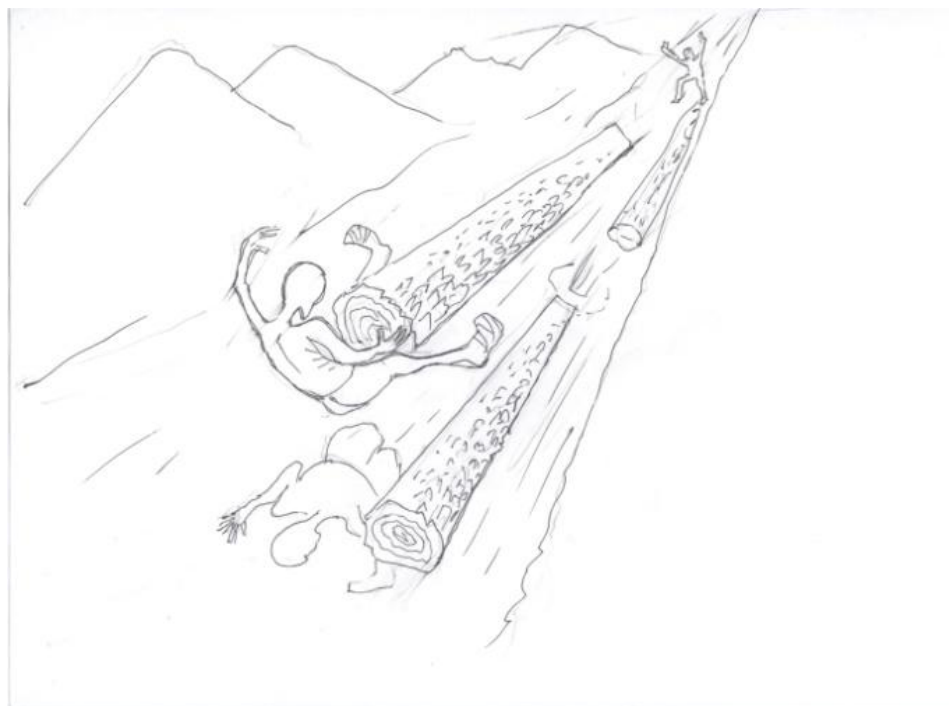
囚人と運搬大車



運搬中の事故



運搬中の事故



伐採場の事故



伐採作業の場合、伐採した木を山の尾根まで背負って運ぶ。傾斜地で重い丸太を背負って運ぶ作業は、既にすべての力とやる気がなくなった囚人には地獄を凌駕する苦役である。重い木に押さえ付けられて喘ぎながら、傾斜をひどく息切れして登りながら大声で番号を叫ばなければならない。喉からは生臭い臭いがし、息が顎に詰まるほど上がる。虚弱な囚人は重い木の揺れに引きずられ、瞬間からだの均衡を失って倒れ、そのまま木に敷かれたり下に転がり落ちて重傷を負ったりする。

その他にジャガイモ、豆、トウモロコシ農作業及び各種野菜栽培作業などがある。主に女収監者が配置される。冬には凍りついた堆肥運搬作業をする。

堆肥の運搬作業



2008年のある寒い冬に女性囚人はカチカチに凍りついた山のように積まれた堆肥の運搬作業中であつた。下から洞窟のように深く掘って入る。その中は暖かいので多くの女性囚人が中で働く。ところが外部から堆肥の山に亀裂が見え始め、間もなく崩れることが明らかになった。一部の収監者がその危険性を指摘したが人間の生命の尊厳性を認めない担当監視保衛員はこれをずっと黙殺した。ついに山のような堆肥が崩れ、多くの女性囚人が即死したり重軽傷を負ったりした。全巨里教化所でよく起きる事故の一例である。

堆肥崩壊事故



朝出勤して作業場に到着すると小さな窟の入口が見えた。これが坑である。廃坑にし

たものを中国が銅鉱石を買うと言うので再び掘返して入り、前に採掘した所に少しずつ残っている銅鉱石を掘り出すのである。大きな木の背負い桶を背負い一列に並んでどん詰まりまで行くのだが、狭い坑道を 1500m 入らなければならない。坑道の天井が人の背より低いところが多く、幅 3m 高さ 1.5m で広がったり狭かったりする坑道の片側にはどん詰まりから流れ出る水路があり、その壁面には何の被覆も無い高圧線が 3 本張っており、また照明の電線が 2 本あり、常に感電の危険がある所で収容者は全く保護衣の着用も無く入る。30~50m 間隔で赤く灯る電球が道案内をするのが、くねくねした道で前が見えないときがあり、棒を持って探り歩く盲人歩きをするときもある。50m 入っただけでも底に淀んだ水で履物がずぶ濡れになる。

囚人にとって履物は非常に丈夫でなければならず、半年に 1 回程度 1 班に 12 足支給されるが、多くの囚人は裸足で歩いて通わなければならない。頭を使って履物を手に入れ、強く縫ってゴムのようなものをかけて履けば、靴が違うのは当然であり、夏に冬靴を履く人がいて冬に夏靴を履く人がいる。前方にぼやけて見える所があるが、以前に作業した垂直坑が空と結びつき、怖くて見下ろせば目眩がし、ここで多くの人々が死んだという。このような条件で墜落と崩壊がしばしば発生して多くの囚人が死んだり負傷したりしても何の対策も立てない。

2009 年 3 月全巨里教化所 2 課 1 作業班の囚人は洞窟で採掘作業の真最中だった。坑の中は広いが入口は狭い形態なので、拘禁者は坑を出入りするとき常に頭を下げて通らなければならなかった。光が入らず、真昼でも暗い坑内に照明は電球 1 個が総てであった。

いつもと同じように、先に発破組は鉱石が埋まっていると見られる場所を探して発破作業を進めた。発破後、発破組に属する作業者は天井を木の棒で突いて鉱石が落ちるのを確認して坑の外に出てきた。その後採掘組が入ったが、突然ドシーンと大きな音がし、坑内から風と煙が吹き出してきた。事故が発生したのだ。

天井から大きな石が落ち、採掘組であった東孝一(トウ・ヒョイル)を含む 5 名が死んだり重傷を負ったりした。東孝一は石の下敷きになり腎臓が破裂して死んでいたし、卞鉄振(ヒョン・チョルジン)は額に石が当り黒い黒子のような傷を負って死んでいた。金正詰(キム・ジヨンチョル)は石の下敷になり「助けてくれ」と声を出していたが、石から引き出した後何メートルか運んだら死んでいた。宋光男(ソン・グァンナム)は落石で足首が折れて切断手術を受け、その後病氣保釈で出所していった。金世権(キム・セグワ)も腰を大きく怪我して教化所病院に入院したが、賄賂を提供できず、病氣保釈で出所できなかった。彼は結局教化所内で死亡した。

事故発生後、教化所では死体をプルマン山に運んで焼いた。東孝一の母が翌日面会に来たが、教化所生活中に息子が死亡したという知らせを聞いて茫然自失した。彼の母は嗚咽しながら「教化所が自分の息子を殺した」と言ってトウモロコシ粉を壁にばら撒き、気が抜けたような状態で帰って行った。

劣悪な作業環境によって各種の事故が絶える間も無く発生する。木に轢かれて死ぬ事故、坑が崩れて死ぬ事故、斧に刻まれる事故が最も一般的で最も普通である。ある日には、乾燥していないブロックを 2 階の高さに積み、崩れて 1 度に 10 余人が死ぬ事故も発生した。

作業場で執行した公開処刑の死体をそのまま何日か放置する。収監者はその死体を見ながらその前で作業したりもする。

ブロック事故と放置された公開処刑された遺体



死体はプルマン山で火葬にすれば、それで総てのことが終わるのだ。家族には通知書も送らない。

堆肥運び



作業場で保安員が呼べば直ぐに走って行き、その前に膝を屈めて跪かねばならない。そしてタバコの吸殻を拾ったとか、他の囚人と話をしたなどの極めて些細な罪目で蹴られた

リシャベル等の道具で片っ端から殴られるのが一般的な慣例である。

膝を屈めて跪けば…



スコップで殴る様子



北朝鮮刑法第 1 条には「朝鮮民主主義人民共和国刑法は犯罪に対する刑事責任および刑罰制度を正しく立て直し、国家主権と社会主義制度を保衛して人民の自主的であり創造的生活を保障することに貢献する。」と書いている。これは北朝鮮当局が収監者たちの処遇を一定水準保障する義務を持っていることを示している。北朝鮮教化所の運営と管理は、現実的に北朝鮮自らの法律も守れずにいる。

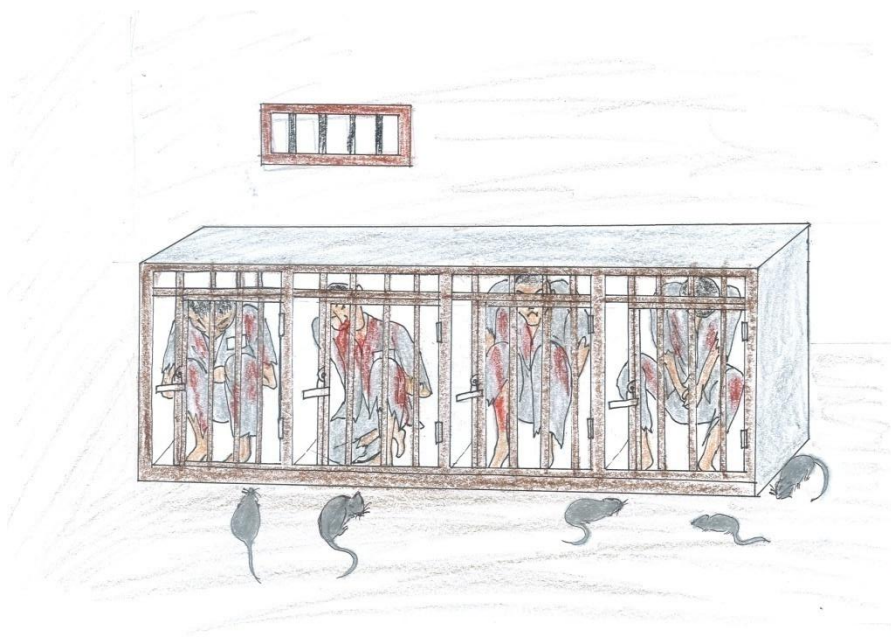
V. 処罰制度

警護員たちは、ともすると囚人を鉄窓にぶら下げさせて鉄窓から落ちれば厳しい鞭打を加えた。穩城郡保安署の李哲敏(リ・ Cholmin)という警護員は自分の気分が悪ければ何の誤りも無い囚人の口を開けさせ、そこに痰唾を吐いたりもした。安全員たちの激しい殴打で耳が裂けて鼻血が吹き出し、骨を砕かれても収容者は抗弁一つできない。逃走者の場合、首にロープを嵌めてトラックで犬のように広場をズルズル引っ張って殺したりもする。激しい殴打の場面を見て泣いたという罪目で女性囚人たちは鞭打されたりもする。銃で肩を下し打ち、靴で蹴飛ばし、まるで獣を殴るようにする。そのような程度ではたいした事ではない。殴られて何日も起きられないことは日常茶飯事といえる。各種処罰方法は次の絵のようである。

角材による殴打



独房の様子



2001年1月中にあった事件である。

方成男(パンスナム)は会寧市徳興里居住者で本人が知っている青年であった。当時25才程度であり脱北の罪目で1999年度12月頃収監された。李清柱(リ・チョンジュ)は同じ年齢で、やはり会寧市出身だった。彼は徒党を組んで喧嘩した罪目で服役中だった。2人の若者はパンツだけの状態で冬の酷寒の中、朝から午後まで一日中屋外に跪いて座らされた。立上がったたり動いたりすれば室内で見守る保安員に蹴飛ばされた。罪目は確実でないが恐らくタバコを拾ったり食べ物を掠めた程度だったのだろう。当時、教化所当局は殺す目的で処罰することが日常茶飯事であった。かれらも殺すためにこのような処罰を加えたのだ。2人の惜しまれる若者はその日に凍死した。

膝を屈めたまま凍死



膝に角材を挟み入れ…



ツバメ拷問



吊るし拷問



起重機、飛行機、オートバイ拷問



上の絵で見るように処罰の中には起重機、飛行機及びオートバイ処罰というものがある。収監者は起重機、飛行機または、オートバイをまねて何時間も立っていなければならない。声も一緒に出さなければならない。中断した時に殴られるのがあまりにも恐ろしく、死を覚悟して何時も耐えなければならない。その苦痛はとうてい言葉で話すことができない。

鉄窓ぶら下げ殴打



ボロを着た女性囚人たち



VI. 結 論

上に説明した内容は、全巨里教化所に実際に服役した証人 81 人中 11 人の経験についての深層特別証言を中心にしたものであり、その他全巨里教化の経験者総 81 人の証言、この間北韓人権情報センターが収集した総ての文献資料と総 6,404 の証言など、北朝鮮の人権侵害に関する基礎資料(添付した参考文献を含む)を参考にしている。ここに説明した一部は、既に言論に公開された内容であり、今まで一度も反論されなかった内容である。

現在、北朝鮮の各種拘禁施設で発生している北朝鮮政権による反人倫犯罪行為は、もはや疑いの対象ではない。この間の膨大な学術資料がこれを証明している。

反人倫犯罪は発生地域に限定されず、既に人類全体の問題になっている。北朝鮮の場合、未だに明らかにされていない、途方もない犯罪が行われていることは疑いの余地がない。このような人類全体に対する犯罪を、座視すればこのような犯罪は再びこの世の中に広く広がっていくだろう。上に列挙した犯罪行為は、今この瞬間にも広範囲にそして制度的に北朝鮮で行われているという事を、私たちは一時も忘れてはならない。21世紀、私たちの人類の良心は今、北朝鮮の反人倫犯罪を終息させよと命令している。これは当然、人間としての責任であり義務である。

北朝鮮の人権弾圧の実状に対し、国連総会では毎年決議文を採択するほどであり、その事態の深刻性は既に国際社会に知られている。最近採択された2011年度国連総会決議文では、北朝鮮当局が拘束中の総ての囚人に対する待遇を改善し、総ての人権弾圧行為を即刻中止することを要求している。同時にマルツ・ダルスマン北朝鮮人権国連報告官も、「現在、北朝鮮には20万名余の政治犯が裁判無しに拘禁されていることを確信している。」と国際社会に警鐘を鳴らしている。

従って、今後北朝鮮の人権実態と北朝鮮当局の全人類に対する犯罪行為に対する調査は徹底して継続すべきであり、継続する。

総ての国家は自国の拘禁施設を公開している。ただ北朝鮮当局だけがこれを拒絶している。隠すことが無いならば、北朝鮮がこれを拒絶する理由は無いのではないのか。北朝鮮が願うなら、日本と韓国を始めとする世界総ての国家の教化所(刑務所)を訪問できるではないか。北朝鮮人権国連報告官の北朝鮮入国を何故未だに拒絶するのか。北朝鮮は、何々の罪をそのように沢山作ったので基礎的な国際慣行さえも拒絶するのか。

この報告書は日本の人権団体名で、金正日国防委員長を継承した北朝鮮の新しい指導者金正恩に提出されるだろう。金正恩指導者が、問題の深刻性に照らして即刻調査を実施し、真相を明らかにすべき国際的責任を全うすることを願う。もし、この報告書の内容が事実と反するならばその理由を条目ごとに明らかにしなければならない。そして、北朝鮮の総ての国家拘禁施設を国際社会に公開しなければならない。もし、これを拒絶するならば、北朝鮮の新たな指導者金正恩は北朝鮮当局による今までの総ての反人倫犯罪の責任を全面的に負うことになることを厳粛に通告する。

犯罪の深刻性に照らし、国際社会はこのような犯罪行為を容認しないという確固たる決心を新に確かめ、北朝鮮住民を朝鮮民主主義人民共和国の恐るべき犯罪から救出するために団結して強力な活動を展開しなければならない。想像を超越する人間虐待は、今この瞬間も続いており、数多くの無辜な人間が泣き叫んでいることを忘れてはならない。

参考文献

- ・北朝鮮の人権実態 1: 身体的自由 / 統一研究院
- ・統一路. 通巻 266 号(2010 年 10 月)pp. 58-69
- ・抑留女性記者収監 北朝鮮教化所はどんな所: 安保問題研究院、2010. 10. 01
- ・「人間 地獄」姜哲煥、週刊朝鮮. 通巻 2061 号(2009-06-29)pp. 34-38、朝鮮日報
- ・北朝鮮の拘禁施設及び行刑制度に関する考察、キム・アンシク、矯正談論、第3巻第1号 2009年6月、pp. 95-122、

アジア矯正フォーラム

- ・国際社会の対北人権政策と北朝鮮の対応に関する研究：国連と米国の対北人権政策を中心に / パク・ヒジョン、高麗大 政策大学院、2008. 8
- ・北朝鮮の人権実態：身体的自由、1 / 統一研究院、統一路、通巻 243 号(2008 年 11 月)pp. 54-63、安保問題研究院
- ・北朝鮮拘禁施設の実態と改善方案、第 16 次専門家フォーラム、平和財団、2007、
- ・北朝鮮第 2 次国家人権報告書に対する国連人権理事会での質疑・応答、イ・ウォンウン、国際人権法. 通巻第 4 号(2001. 11)pp. 159-179、国際人権法学会
- ・統一後北朝鮮地域矯正政策：東西ドイツの事例を中心に、ハ・テヨン、矯正研究. 第 30 号(2006. 3)pp. 7-3、: 韓国矯正学会、2006. 03. 30

注：文中のハングル名の一部漢字表記は発音を漢字に置換えたものであり、実際とは異なる場合がある。

反人倫犯罪の現場 北朝鮮の教化所 第 12 号全巨里教化所 編

著者：(特非)北朝鮮難民救援基金/北韓人権国際活動家メアリ

発行：(特非)北朝鮮難民救援基金 113-0024 東京都文京区西片 2-2-8 A-101 E-mail:nkkikin@hotmail.com

Tel/Fax:03-3815-8127

発行日：2012/02/02